

## 矢口祐人著 『憧れのハワイ——日本人のハワイ観』

(中央公論新社、2011年)

岩原 紘 伊

## はじめに

本書は、ハワイ研究者である著者の素朴な問い「ハワイにある『観光の時間と空間』のなかで、私たちはどのようにハワイを理解しているのだろうか」(pp. 238-239)を出発点に、観光という現象を中心軸にして、詳細な日本におけるハワイのイメージの歴史的展開が描かれている。また、本書は、ハワイ渡航者の手記、新聞記事、映画などメディア資料を主な分析対象としている。

近代観光は、19世紀前半のヨーロッパにおける交通技術の発達とライフスタイルの変化により誕生した。また、観光は20世紀に最も成長した産業と言われ、世界観光機関によると、2011年の国際観光客数は9億8200万人を超えている。その巨大な産業へと変貌を遂げた観光が研究主題として追究され始めたのは、比較的新しい。評者の専攻する文化人類学においては、ヴァーレーン・スミス編集の『Host and Guest』(1977)が人類学的観光研究の芽生えとされている。人類学的観光研究の出発点は、人類学者が調査地におけるフィールドワーク中に観光という現象を無視できないものとして意識するようになり、観光と調査地の関係を正面から掬い取ったうえで当該社会を捉える試みをはじめたところにある。この点は、著者の本書執筆における動機に通じるところがある。観光に研究者の関心が寄せられるようになった1970年代は、本書でも触れられているように、ジャンボ機の就航によって大量輸送の時代に突入し、また労働時間の減少により余暇の使い方に価値が見出されたことによって、「観光の大衆化」が加速し、観光形態が大きく変化した時期である。それにより、観光に関わる事象がさまざまな場面で突出し、その社会や文化に関する影響を研究者が意識せざるを得なくなった時期でもある。

観光という現象に研究者が関心を寄せるのは、単に観光が社会現象として重要なだけでなく、観光の力学によって「文化」やそのイメージが意識的に操作されたり、再構成されたり、消費されたりする対象となるという、文化をめぐる問題と密接に結びついているためでもある。<sup>1)</sup> 本書が扱うのも、まさにその問題である。

本書の舞台であるハワイは、もともとポリネシア系先住民が王国を形成していた。1779年にイギリスの航海家キャプテン・クックによって「発見」され、1810年のアメリカの宣教師団の到着以後、先住民のキリスト教化と白人による植民が進む。このキリスト教化の過程において、先住民が日常的に営んでいたフラやオリをはじめとする「伝統」文化や信仰は否定され、急速に失われたといわれる。しかしながら、入植者である他者によって、その否定された「伝統」や「文化」は、訪問者に対する「見世物」として再生産さ

<sup>1)</sup> 山下晋司編『観光文化学』(新曜社、2007年)、2頁。

れ、後に観光資源化されていく。<sup>2)</sup>

1893年に最後の国王リリウオカラニが入植者である白人たちのクーデターにより王位を追われ、現在アメリカを代表する企業となっているドール社の創始者の兄サンフォード・ドールを大統領とする白人政権が誕生し、1897年、ハワイは米西戦争を契機にアメリカに併合される。以降、ワイキキビーチの観光保養地化開発を皮切りに、ハワイの観光地化が進展する。アメリカにおいて具体的なハワイ観が形成されたのは、アメリカ本土との間に定期航路が開設され、本格的に観光開発が開始される1920年代以降のことであり、ハワイの観光事業者たちの巧みな新聞、ラジオなどメディアを通じた観光推進戦略によるものであった。既に18世紀頃から、西欧においてハワイは「太平洋の楽園」という個別の地域性を持たない漠然としたイメージによって位置付けられていたものの、その漠然としたイメージは、はじめは観光宣伝のために、そしてやがてはハワイを主題とした映画のなかで効果的に「楽園」として再生産され消費され、そのなかでアメリカ人のハワイに向けるまなざしが具体的に形成されていった。<sup>3)</sup>

著者は、「さまざまなハワイ」を意識することを提唱している。つまり、ハワイ観は一樣に形成されるものではなく、ハワイと「他者」との関係性のなかで形成されるものであるということである。本書が描き出すことを試みるのは、日本人のハワイ観である。それは、アメリカにおいて普及している「ハワイ」のイメージに全面的に依拠するものではなく、日本とハワイのさまざまな相互関係のただなかで位置付けられ、連続性を持ちながらも歴史的背景に影響を受けつつ変容し形成されてきた動的な「ハワイ」観である。本書の目的は二つある。ひとつめは、「旅行を巡る語りが、ハワイという他者をいかに生み出してきたのか考える」(p. 5) ことであり、もうひとつは、読者に「ハワイ先住民の文化・社会と日本との関係を捉え直し、「幅広く柔軟な先住民の文化理解」(p. 236) を促すことである。こうした問題意識は、20世紀における近代観光形態を学術的に捉えるためにも、また観光という現象に付随する問題に対し包括的な社会的理解を促すためにも重要なものである。

## 本書の内容と構成

序章では、まず、日本とハワイの国際関係のあり方に留意しつつ、20世紀の日本における「ハワイ＝観光地」というイメージとハワイをめぐる語りの創出の連関の過程を明らかにするという本書の目的と意義が述べられる。その後、本書で検討される日本人が持つハワイ観の前提となる戦前のアメリカによるハワイ観光地化の経緯と背景が概観され、第一章以降展開される論考の前提が整理される。

第一章「ハワイを訪れる旅―戦前」では、戦前までの日本人のハワイ訪問の様態がハワイへ訪れた日本人達の記録を手掛かりに船中からハワイにおける体験まで詳細に記述される。当時のハワイを訪れる日本人は、観光が主な目的ではなく、アメリカへ向かう途中で立ち寄ったもの、仕事の合間に見学するものなどが大多数であった。故に、観光体験は

<sup>2)</sup> 山中速人『イメージの「楽園」——観光ハワイの文化史』(筑摩書房、1992年)、29-40頁。

<sup>3)</sup> 同上書、85-105頁。

限られた短い時間のなかで行われ、アメリカ本土からの観光客とは異なるスタイルのものであったという。一方、そのような特異な状況の下、彼らが最も印象を受けたのは自動車の普及や道路事情に象徴される「先進国」アメリカの近代化の進展度合いであったことが示される。同時に、彼らは、日系社会の存在によって生成された、異国における「日本らしさ」も体験したという。こうしたハワイにおける日米文化の混淆状況や訪問者を感動させる美しい自然は、体験者によって手記に綴られ、1920年代後半に流行したハワイ音楽によって拡散したハワイ像のイメージに重ねられ、今日のハワイ観に部分的に引き継がれていることが述べられる。

第二章「アジア太平洋戦争とハワイ」では、真珠湾攻撃以後、第二次世界大戦中に展開されたハワイ論に焦点が当てられる。戦時中の日本人が得ることが可能なハワイ関連情報は、「戦争」に纏わるニュースや写真などに限られ、追従するハワイに関する表象の殆どは戦争を正当化するためのものに変容していった。戦前、日系人のアメリカ国籍取得は当然のことと見做されていたにも関わらず、戦時中、ハワイの日系人は「同胞」と位置付けられており、さらに、戦前は無関心であったにも関わらず、ハワイ先住民はハワイ論者から、志賀重昂の『日本風景論』（1914）を論拠とする日本系譜論やカイウラニ王女と日本の皇族にあった縁談に関する逸話などに依拠して、日本とハワイとの強固な繋がりや証と都合よく解釈される存在となったことが述べられている。今日までの日本とハワイの関係の歴史のなかで、この時期のみ日本人がハワイの地に降り立つことは叶わなかったという事実がありながら、ハワイを「自己の一部」として解釈する心理的に「近い」ハワイ観が形成されたことが、戦中期のハワイ論の特徴としてまとめられている。

第三章「ハワイの花」では、終戦直後から1964年の海外渡航自由化までの期間におけるハワイのイメージの形成過程が検討される。まず、ハワイに関するミュージカル、映画、音楽など大衆文化における「ハワイ」の再興が紹介され、人々が終戦直後という不安定な日々の生活との対比の中で、メディアから次々と発信される色鮮やかなイメージのハワイに惹きつけられ「憧れ」を抱くようになる過程が述べられる。続いて、メディアによって注目されることで話題となり、一般の人々のハワイへの羨望を一層高めた指摘される、ハワイへの渡航が制限されていた時期の著名人たちのハワイ訪問について詳述される。そして、ハワイの日系アメリカ人社会と日本からの訪問者との関係性の戦後の変化についても確認され、日系アメリカ人の生活のあり方も近代的アメリカの生活としてハワイへの「憧れ」の対象として組み込まれていったことが指摘される。

第四章「海外渡航自由化とハワイ」では、1964年の海外渡航自由化前後数年間のハワイ観光をめぐる一連の多様な動きが具体的に詳しくまとめられている。まず、海外渡航自由化前の動向がまとめられ、海外渡航自由化に最も大きな期待を寄せた観光業界が行ったハワイの魅力を紹介した雑誌の発行、海外旅行積み立て預金キャンペーン、ハワイ旅行懸賞を目玉としたコマーシャルの登場、エルビス・プレスリーの映画「ブルー・ハワイ」など、当時の日本人のハワイへの関心をより高めた要因が詳述される。続いて、観光産業のハワイにおける基幹産業化の背景や観光産業を発展させる契機となったジェット機の就航など、ハワイ側が日本人観光客の誘致に積極的に動くことになった背景が整理され、具体的にハワイ政府が日本人観光客誘致を目的として実際に展開した美術品の展示会、ハワイ観光展などの熱意にあふれ、かつ戦略的なプロモーション活動の様子が示されている。さ

らに、当時の海外旅行の位置づけ、渡航直前の旅行持ち物や礼儀作法の悩みが紹介されたうえで、渡航自由化後に実施された観光ツアーの旅程、観光名所をめぐる「サイト・シーイング」型の観光などが当時の観光のあり様として網羅的に記される。そして、当時の観光の特徴であり観光客に好まれた団体旅行は、それに応じた画一化・規格化されたサービスが観光業者によって提供されるようになったことから、観光客と地元住民の間の距離の伸張に結びついたことが指摘されている。

第五章『『憧れ』から『定番』へ』では、ジャンボ機の就航、大阪万博の開催、変動相場制の導入、1960年代から70年代のハワイ政府による熱心なプロモーション活動、ハワイにおける日本人の観光形態の多様化、80年代のアメリカとハワイにおける日本脅威論など、日本人観光客の数が最高に達した1997年までのハワイ観光の大衆化の過程にあった事項が時系列に沿ってまとめられる。まず、観光の大衆化の大前提には、ジャンボ機ボーイング747型機の就航による航空運賃の低価格化がある。これにより多くの人々にとって海外旅行は比較的手の届きやすいものとなる。続いて、1970年の大阪万国博覧会のハワイ館の展示内容、ハワイ経済における観光産業の隆盛と日本向け観光誘致活動の戦略的变化が詳述される。次いで、日本国内の国民経済の変化にも焦点が当てられる。経済成長が日本人の目を余暇活動やレジャーに向わせ、同時に変動相場制の導入によって円高ドル安が進み、円高の持続が海外旅行の促進、ハワイへの観光客の急増に大きな役割を果たした。そして、著者は、「憧れ」から「手軽」に行ける観光地と変化した1970年代からのハワイ観光に2つの潮流を見出している。第一に、女性を取り巻く社会経済状況の変化により、女性、特にOLのハワイへの渡航者数が増加を始めたことであり、第二に、海外ウェディング・ハネムーン先として選ばれるようになったことである。また、この時期のハワイと日本の観光以外の特徴として、日本企業や投資家が次々と進出し、1980年代における日本からの投資の増大は、当時アメリカで起きていた「ジャパン・バッシング」と相俟ってハワイ側に大問題と見做されるようになっていくことが指摘されている。そして、日本の進出は観光産業にも及び、旅慣れた日本人にとっては魅力的ではない旅行先、また戦後形成された地元コミュニティと断絶関係にあるハワイ観光の形態が維持されるなか、観光産業に搾取されていると感じていたハワイ先住民たちからも強い反発を受ける事態となったことが明らかにされる。

第六章「癒しを求めて」では、ハワイを訪れる日本人の数が減少し始める1998年以降の日本人のハワイ観のあり方に焦点が当てられ、ポスト大衆化時代のハワイ観光が論じられている。はじめに、著者は観光客減少の原因としてテロや景気悪化が従来挙げられてきたことに対し、むしろ原因は渡航先の多様化にあることを指摘する。そして、そこから浮かび上がる、リピーターによって支えられる今日の新たなハワイ観光の傾向を21世紀のハワイに関する語りの中で頻繁に言及される「ロコ」、「フラ」、「エコ」という言葉を手掛かりに明らかにすることを試みる。「ロコ」は、「ローカル＝地元」(p. 202)に由来するハワイ初心者が行かない地域あるいは先住民やアジア系住民を指し、リピーターがハワイ初心者と自己のハワイ体験を差異化する効果をも持ち合わせる言葉である。一方、ハワイにおける「ロコ」の意味はアイデンティティに関わる重要な政治的概念であることを指摘しつつ、そうしたアイデンティティに支えられた「ローカル」性こそが、観光客の「ロコ」への憧れを生み出す言説として機能していることを示す。続いて、今日の「フラ」に

対する注目の背景として、近代都市生活と対照的な時間と空間感覚を有する（と想像される）「本物のハワイの伝統」（p. 210）への憧れがあり、視覚的な経験からより身体的な観光体験が重視されるようになってきていることが指摘される。そして、著者はこうした見方が伝統文化に人々の関心を向ける一方で、先住民を現代から切り離し、原始的と位置付ける、20世紀を通じた先住民をめぐる語りに通ずる部分があると批判を寄せている。次いで、リピーターに人気の高い「エコ」ツアーについても考察がなされ、それが観光客の自然を満喫するという欲望を満たすものにはなっていない現状に対し、疑問が呈される。以上、近年のハワイ観光で語られる3つの言葉を考察したうえで、著者はそこには今日の日本社会で流布する「癒し」の希求が通底していると指摘し、それは今日の都市社会を包み込む生活に対する不安の投影であるとする一方、こうした今日の「癒し」を基礎とする観光形態は、同時に、「搾取」を招く観光産業の負の部分を意識させないという矛盾を孕むものであると論じる。

終章では、まず1924年の「排日移民法」と位置付けられるジョン・リード法が施行される以前の出稼ぎ先としてのハワイ、それ以降の「観光地」としてのハワイを時間軸で区別し、歴史的変遷が対比的に振り返られ簡潔にまとめられている。排日移民法によって規制されるまで、ハワイは健康な男子が高い賃金労働を求め移住する、有望な出稼ぎ先である一方、その後この形態は時代によって変容しつつも日本にとって観光地として魅力を発揮し続けていることが述べられる。そして、さいごに、著者は観光によって形成された空間で経験されるハワイと、ハワイの人々の日常空間で経験されるハワイの間隙を指摘し、今後のハワイ研究においてそのイメージを形成してきた日本の観光言説にある多様な力学を捉える必要性と先住民文化の理解を深化させていく必要性を提唱する。

## 本書の成果と課題——むすびにかえて

はじめに、本書の魅力と特色を観光研究の立場から三点あげておきたい。本書は、「送り出し側＝観光客（ゲスト）」の「受け入れる側＝ハワイ（ホスト）」へのまなざしの歴史的形成過程を具体的かつ詳細に扱った論考として目を引く。これまで国際観光に注目した論考において、ゲストとホスト社会の関係性を扱ったものは少なくない。しかしながら、その多くは観光地におけるゲストとホストの関係性の非対称性や第三世界の観光で観察されるポスト・コロニアルの状況にばかり注目し、ゲスト社会で構成されるホスト社会に対する総体的な「まなざし」のあり方について綿密な検討をしてこなかったように思われる。また、観光地における観光客の研究は、ゲストを観光客という大きな枠組みに包摂しがちであり、その特性や送り出し社会におけるホスト社会に対するまなざしの文脈がいかなるものであるか、本書のように丁寧に考察することは希有であった。また、日本人の観光客を対象とし、記述している観光研究も数少なく、日本人の特定の観光地との歴史的関係性を辿りながら、その向けられる「まなざし」が形成される過程に焦点が当てられている点も特筆すべきところである。

次に、文化の問題に偏向せず、観光産業を巡る動きについて日本とアメリカの国際関係や外交史の観点から考察し、そこからハワイ観の形成を捉え議論を展開しているところも非常に興味深い。そこから、ハワイという観光地を起点にして、観光産業がマクロレベル

の政治と結びつきながら発展してきたという側面へと議論の幅が広がっている。従来の研究では、強力な観光イメージ創出装置としての政府の役割は検討の対象となっていたものの、対象に具体的にどのような戦略をもってそのイメージが発信され機能することになるかという部分は十分に検討されてこなかった。とりわけ、全体の国際観光客の半数にのぼる111万人強の日本人観光客を受け入れているハワイ政府の戦略の様態を明らかにしたことは重要であり、観光イメージの創出と国際観光誘致に関する研究に新たな知見を提供している。

さいごに、著者が観光の作り出す「イメージ」と現実には介在する齟齬について言及し、問題提起を行っているところも注目に値する。著者は、ハワイに住む人々の生活にある「現実」を捨象する作用を持つ今日の観光形態に批判を加え、それを踏まえたくて今後あるべき観光研究の射程を提唱する。こうした近代観光が引き起こした様々な観光の負の側面に対する批判は、近年研究者や世界観光機関をはじめとする国際機関、NGOなどだけではなく、観光を受け入れる側、特に観光により周縁化された地元の人々からも寄せられている。実際、評者の調査地であるインドネシア・バリ島もハワイの状況と幾分類似した状況となっている。観光は、現在バリ島の基幹産業となっているものの、実際には島の外部の者（政府や外国、ジャカルタの資本）が観光産業によってもたらされる利益の多くを握っているため、バリ人はそうした観光の実情に不満を強めている。こうした動きに対して敏感になり、観光の文化表象と文化の所有者は誰かという問題を問うていくことは、今後、観光研究を発展させていくために非常に重要なテーマとなると思われる。

これまで述べてきたように、本書はハワイ研究に留まらず、観光研究に対しても多大な貢献をしているが、些細な点ながら疑問に思われるところを二点ほど示しておきたい。ひとつは、今日の観光の力学は二国間関係で完結するものではないにも関わらず、現代の日本以外でも同時多発的に高まっている新しい観光形態への関心とハワイにおける日本人の観光形態との連繋に対する目配りが少ないように思われる点である。特に、第六章で「エコ」、「フラ＝伝統文化」、「ロコ」が今日の日本人観光客が求める体験として取り上げられているが、こうした環境、文化、地元への関心の高まりは、エコ・ツーリズムやエスニック・ツーリズムなど、新しい観光形態に対するグローバルなレベルでの関心の高まりに同調するものでもある。若者のエスニック文化への関心の高まりについて触れられてはいるものの、こうした同時多発的に起きている観光形態の変化と日本人のハワイ観光に対する新しい視線が重なるものなのか、異なるものなのかという点についても言及されると、ないものねだりではあるが、本書で焦点を当てられた今日の日本人観光客のハワイ観のあり様が一層際立ったのではないかと思える。

もうひとつは、リピーターがなぜ何度もハワイを訪れ、ハワイに「はまっていくのか」という観光客の動機の形成過程について、考察が少し足りないように思われ、「はまる」という感覚は理解できるものの議論として釈然としない部分も残った。著者は、「癒し」を鍵にリピーターのハワイ観光の動機を説明している。しかし、なぜ「癒し」との関係性において「本物のハワイ」への探求が繰り返されるのか、なぜ彼らが「癒し」を求めるのに、例えば同じ「楽園」と表象され、多数の類似する日本人観光客を惹きつける評者の調査地バリではなく「ハワイ」を選ぶのかというところは、詳細に記述されていない。これらは、今日の日本人観光客のハワイ観を考察するうえで重要な観点であると思われる。

以上のように、今後練られるべき課題はあるものの、それらは本書の稠密な考察の成果に対する評価を妨げるものではない。本書の試みは、観光を鍵にハワイと日本の関係に対する理解だけでなく、観光地のイメージの生成過程と動態に対する理解を深めることにも貢献している。